

使所、幸々今雪隠と稱し、然し雪隠ノ音に似せてセツイン
 とは言わすにセツインとつまなふが本當で、支那日本誌
 それ以前に使所ノ設置はなかり、すべてオマルでした。題
 名ノ碧巖は遠藤ハ胡人(ヘトルキス)ンで、眼が青かつた事
 に因り、最初は碧眼録と書きまし左が、後現在の通り碧眼
 録と改めたものですが別に遠藤ノ言行には関係なく、主
 として唐代各州の有名禪師ノ問答ばかりを集めてこれに
 講評を加えたもので、本著には雪竇と因悟ニ禪師ノ著語
 が重なり、私は漢文ノ勉強にもなると思つてより始に左
 のです。が、漢文は言わすもかまその内容に至つては如
 何なる程度註録も三舍ノ難解で、禪宗は宋代と絶頂と唱
 思つてゐる様ですが、実は唐代を以て最高と致します。

赤木村大庄屋文書 薪式千貳百拾七束、不熟分
 寛 薪式百貳拾四束 價 小麥から三拾七メ 價 大藪竹
 三十二本 價 大根拾八本 大根十八本も珍ですが、大
 藪竹以外はすべて只といふ事になりましよ、當時米一
 升が四十文位でしたから一升四十文一斗四百、一石四千
 即ち一兩、大根は其の 上 心 の四文位、十八本なら七十二
 文かそこら、すると日当にもならぬ様な代価である上、
 この大根は多分卸し大根用でしょう、あまり沢山買ひ込
 んでは古くなるから、必要だけを。二十九 鹿皮は中
 々調遣出来ぬから大庄屋小庄屋共に麻疹と稱して額と見
 せぬ、というところでしょう。

(中畧)
 足も殆んど平常と変らぬ様に回復し、左が(編者注
 交通事故に会い四月以来入院)まだ退院とまではゆかず、まあ
 八月一杯はかゝりましよるか。

以上 史談 愛媛 傍々
 七月二十日
 久々 敬具
 (お祈り、本稿編集子宛私信ながら、会員の冬号までは、掲載済承済)

青輪 三十八
 浪速の津も波りゆく
 大阪 木 田 長

暑中が何い申上申す。
 毎月毎月史談会報をいた、たゞ、本当に百難く心からお礼申
 上げます。御究ノ成業も大いに挙がり、心からお喜ぶ申
 します。(中畧)

私達も私達なりに公害ノ多い都会の焼き付く様ならず
 汗かくです。既に昨力も限界に達している初老ノ身に、史
 談会ノ記事と読ませくいたたく事、何にも分り難い清
 涼劑となりませす。枚擧を憚り故郷ノ良さを知り、祖先を
 思う、私には何にもかえ難い樂しみ一つでございます。

私日考える、大阪も昔の十二口と違ひ百八首ノ歌に読
 まれた昔ノ風情はどこにもなく、住み込みの岸も沖一里許
 りノ遠くは去り、高師ノ浜は海水浴も不可能な状態、難
 波江ノ芦はまき、胡弓、舞子も最早水質汚染でこれ又
 昔日ノ影はない。天は二物をよえず、と止むを得ないこ
 とかも知れません。飛鳥王朝の地も住宅で穢れつつあり
 ます。僅かに京ノ祇園祭、十二口の天神祭、住吉祭が地
 方民ノレクレーションの場として昔日ノ面影を止めてお
 ります。本日は往吉祭で約三、四十万人が見物に押掛けま
 す。お神輿も車上と云つた姿です。

二十五日ノ天神祭は天満橋上より拜々まし左が、昔ノ
 船渡御も土佐堀川、堂島川の橋桁が隘路の為くぐれず、
 川下にあつたお旅所まで行けず、川上ノ天満橋と上る形
 となつています。しかし浪速商人ノ鼻息は荒く、威勢の
 よいこと日本一と思おられます。此の日の人出新聞報道で
 は六十万人と云つておられます。(後畧)

(以上)